

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	菅谷 友亮
論文題目	Constructing Evaluations: The Meaning-Making Process of Adjectives		
(論文内容の要旨)			
本論文は、形容詞によって表される評価（evaluation）がどのようなプロセスによりなされるかを明らかにするため、日米の被験者を対象とした実験的手法を用い、評価の心的モデルの構築を試みた論文である。全体は3部構成の合計11章から成り、前半の第1部および第2部は本論文の基盤となる理論的な議論とモデルの構築、後半の第3部は申請者がこれまでにを行った実験とその結果が詳細に示されている。 第1部（第1章～第2章）は本論文の序論であり、研究の目的および研究手法など、本論文がとる基本的立場について詳細な説明がなされている。特に本論文では実験的手法による心理学的アプローチをとることで、評価のメカニズムおよび形容詞の意味を明らかにすること、さらに評価のプロセスは個人の文化的背景の影響を大きく受けると想定されるため、文化心理学の知見を取り入れることが述べられている。 第2部（第3章～第5章）では、本論文のテーマである「評価」に関わる要素を弁別し、その心的プロセスについて独自のモデルを展開している。第3章では、評価の対象および評価尺度という基本的要素に加え、評価に寄与する要素として、対象との競合物や背景的な尺度、評価の基準、評価にかかわる参与者である話し手・聞き手および判断者の役割の区別、さらに評価にかかわる外的要因として時間軸や評価の後続行動といった要素を導入している。第4章は評価の際に尺度への対応づけや基準の設定をどのようにして行っているかを議論し、評価の心的プロセスの複合性を示唆している。第5章は評価の多様なケースを取り上げ、複数の評価対象や尺度が関与する場合や、自己評価と自己・他者間の評価、さらに直観的評価や情緒的評価など幅広く概要している。 第3部（第6章～第11章）は心理言語学的実験に基づく実証的研究である。特に第7章から第10章は、文化的な価値観の相違が評価プロセスにどのような影響を与え得るかを、日本およびアメリカ合衆国で実施した実験結果から考察している。 第6章は、第5章までで提示した評価プロセスのうち、特に競合物、標準および判断者といった要素が形容詞の表す評価において重要であることを、描画タスクおよびアイトラッキングによる実験で示している。 第7章は、評価における主体性・客体性の問題を取り上げる。これは、第3章で導入した要素のうち、話し手と聞き手の視点に特に関連している。日本人が相互依存的であり全体的解釈を行う傾向にあるという文化心理学的知見を参照し、本章では日本人が会話の場で評価を行う際に聞き手の価値観をより強く取り込むという仮説を立て、その検証のため2つの実験をおこなっている。1つめは、値段が高い（expensive）という評価がどのようになされるか、ある製品の値段を場面や聞き手の種類を変え被験者に評価させる実験である。2つめは、ある対象物（棚）を含む絵を被験者に示し、その物理的な高さについて判断させる実験であり、対象物の高さを変えるほか、対象物以外の物体の有無、被験者自身や他者の描写の有無によって条件を設定し、被験者の判断を日米で比較した。これらの実験の結果を統計的に検証し、日本人被験者の方が状況全体を考慮し判断する傾向にあり間主観的な視点を取りやすいことが示されると主張している。 第8章は、評価の絶対性と相対性の文化的相違を取り上げる。日本人は評価対象の			

競合物からの影響を受け相対的な評価を行う傾向にあるとの仮説を立て、その検証のため実験を行った。本章での実験も第7章と同様、対象物（棚）の高さを日米の被験者に評価させるものであり、提示条件を変更し実施されている。実験結果からは、アメリカ人被験者が標準に基づき高さを判断する一方で、日本人被験者は対象物の置かれた状況により強く影響を受けていることを示し、こうした相違が異文化間コミュニケーションでの誤解を生む可能性を指摘している。

第9章は共感（empathy）、すなわち自分の視点を他者の視点に一致させる認知的現象を取り上げる。本章では、場を共有する他者と対象を共同注視し、他者視点をとって評価を行う日本人の傾向を検証するための実験を行った。実験は絵に描写された対象物（ボール）の大きさを日米の被験者に判断させるものであり、対象物の大小のほか競合物の有無、同じ場面にいる他者（大人、こども、動物）が対象物を注視しているかどうかによって条件を変えた絵を使用した。実験の結果からは、日本人・アメリカ人ともに他の判断者との共同注視が行われている場合にはその影響が生じる一方、日本人被験者の場合は他の判断者がこどもや小動物であるときに影響が顕著であることが示されており、社会文化的な要因が評価のプロセスに関与することを明らかにしている。

第10章は、図と地（figure/ground）という知覚的な際立ちの分化とその反転現象を取り上げる。本論文では、英語母語話者が客体的な外部視点を取りやすいため、日本語母語話者と比較して図地反転が起きやすいという仮説を立て、その妥当性を検証した。実験では、英語母語話者および日本語母語話者の被験者に「このバスは大阪に近づいている」「大阪が近づいている」のように図地反転の関係にある表現を提示し、それらの自然さ・容認性の判断を行わせた。実験の結果からは、図地反転した表現の自然さについては顕著な相違がみられなかったが、「ゆっくり」「急速に」といった副詞を伴う場合、図地反転した日本語表現は容認性が低いことから、本論文の仮説が支持されると議論している。

第11章は本論文の結論である。第10章までの内容を総括し、評価の際の心的プロセス一般と文化的影響の双方に関する本論文の主張と議論を整理した上で、本論文から示唆される今後の研究の方向性を示している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、形容詞によって表される話し手の評価とはどのような心的操作によって生み出されているかという問題を扱った研究である。評価の認知的プロセスについて理論的に深く掘り下げ考察し、独自のモデルを提唱するとともに、実験的手法によってそのプロセスの明確化を試みている。例えば「大きい」「高い」といった形容詞の表す意味が何であるかを追究するにあたって、個々の形容詞の意味記述だけでは不十分であり、それらの形容詞で表現される評価や判断の次元で捉えるべきであるという見方は、言語と認知の不可分性をより徹底させたアプローチとして高く評価することができる。本論文は特定の言語理論に依拠しているわけではないが、認知言語学においては実験的研究が一般的になりつつあり、本論文もそうした研究動向に合致したものであるといえる。

本論文は第3章および第4章を中心に、評価のプロセスで機能するさまざまな要素を指摘し、評価・判断という行為が対象を何らかの尺度上に位置づけるという単純なものではないことを、詳細な議論を通じて示している。このような認知的作用は、人間一般に備わるものと想定され、そのため普遍性に焦点が当てられがちであるが、本論文は評価のメカニズムの一般性だけでなく、認知が文化の影響を免れないものである側面を重視し、文化心理学的な観点から実験を行っていることが特長である。このように本論文は、認知の普遍性と文化的な相対性の双方を視野に入れた研究として評価されるものである。

本論文で特筆すべき点は、豊富な実験データに基づく実証性である。本論文と非常に近いテーマおよび手法で研究を行っているChristopher Kennedy 教授（シカゴ大学）の元で申請者が訪問研究員として研鑽を積んだ際に、アメリカ人（英語母語話者）の被験者を対象にして行った実験が本論文には多数含まれている。日本人被験者の実験結果と直接比較することのできるデータは貴重であり、非常に価値あるものである。また、各々の実験のデザインや手法も工夫されており、興味深い取り組みであるといえる。実験で取り上げられた、主体性・客体性、絶対性・相対性、共感の強さといった要因は、日本語研究や文化心理学的研究においてもこれまで着目され、他の言語文化圏と比べて顕著な違いがあると言われてきた。本論文では、客観的な方法により、これまで挙げられてきた日本文化の特性を追試しているという点で有意義である。本研究の延長として今後、従来の見方から予測のできない文化的特性が明らかにされれば、実験的アプローチによる社会文化研究の有効性がさらに高まるものと期待される。

一方で、本論文にはいくつかの問題が指摘される。まず挙げられるのが「評価」と「形容詞の意味」の関係性である。評価の内容を言語化する際に、形容詞が専ら使用されるわけではなく、動詞や名詞によってもその評価内容を表すことができるはずである。しかし本論文では評価と形容詞の意味を同一視していると受け止められる箇所が見られるため、この点についてはさらに整理が必要である。

次に、実験的手法が本論文の最大の特長ではあるが、より適切に実験を行う上で言語事実の観察が必要な場合もある。例えば第10章の実験のターゲット文には主観的移動や主観的变化に関わる表現も含まれているが、被験者によるアドホックな図地反転という認知的現象の検証になっているかは検討の余地があり、それぞれの言語で許容され慣習化されている表現パターンを把握しておく必要がある。また、本論文は文化心理学の知見を援用しているが、実験結果を受けての議論が一枚岩的な文化論に陥らないよう、この分野での研究成果と動向を十分にふまえることも重

要である。

さらに本論文の前半部分と後半部分の関連づけについて、論文の前半では評価に関わる要素について詳細に陳述されているが、それらのうち論文の後半の実験に関わるものは限られている。一貫性をもった論文とするためには、理論と実験をより有機的に関連づけることが求められる。

以上に述べた課題は残るものの、これらは申請者の今後の取り組みによって改善と発展が十分期待されるものである。本論文は言語学における実験的手法の有効性を示唆するとともに、認知心理学、文化心理学にもおおいに貢献する学際的研究として評価することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った後、令和2年9月22日に調査委員で最終審査を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降